

「みんなに勉強できる幸せを」

西中学校 2年 久保田 倫平

戦争の最後の年に生まれた祖父はいつもニコニコしていて、僕が遊びに行くと、とても喜んでくれる大好きな「じいじ」だ。祖父は中学を卒業してすぐ、16才で高知から大阪に出て就職した。家庭の金銭の余裕がなく進学させてもらえなかったからだ。鉄を加工する工場で一生懸命働き、高知に仕送りして弟や妹2人が高校に行けるように助けた。そんな風に助け合ったからか、祖父の兄弟は今でも仲が良いそうだ。

祖父によると戦後という時代もあり、中卒で働く人もたくさんいたという。しかし、やはり高校進学を諦めるのは辛かっただろう。僕はもうすぐ14才になるが、かつての祖父のように、あと2年で働きにでると想像すると、恐ろしくてしかたない。

「進学できない悔しい思いを自分の子どもにはさせない。」

と僕の母と叔母にあたる自分の子どもの教育には力を尽くしたらしい。母も僕の勉強にはうるさい。しかし、その理由が分かった。

時代が違うとはいえ、祖父のように進学したい人が進学できないのは辛く悲しいし、悔しい思いををすると思う。

調べてみると、現在は進学したいが金銭的に難しいという人向けに高等学校等就学支援制度など様々な支援があるようだ。もし、祖父の時代に高校進学の支援があったら、祖父は高校に行っていたかもしれない。

今の日本ではそのような支援もあり、望めば高校に進学できる。

しかし、世界に目を向けてみると、ロシアではウクライナ侵攻による労働力不足のため、14才以上の子どもも働けるよう法律を改正するつもりだという。また、ウクライナでは現在約360万人の子どもが学校に行くことができていない。このような事態を招いたのは戦争が原因であり、多くの子どもが勉強できていない現状がある。

日本に避難してきたあるウクライナ人は日本の中学へは通えたが、高校入試に特別な配慮はなく、高校には進めなかった。現在はオンラインでウクライナの高校の授業を受けているそうだが、柔道が好きということもあり、日本の高校に通いたかったそうだ。避難民への高等教育の配慮は自治体によって差があるのは事実だという。

僕は、たまに「学校を休みたい」や「勉強するのがだるい」と思ったことがある。だが、世の中には勉強したくてもできない人がいるということを知り、勉強するというのはとても贅沢であるということがわかった。

世界中のみんなが勉強できるような世の中に少しでも近づけばいいと思う。そのために、今の僕にすぐに何ができるかは分からないが、好きなだけ勉強できる環境に感謝しつつ、一生懸命勉強していきたいと改めて思った。